

【 New Poetry House 日誌 】  
**名も無き詩の鑑賞会**  
 ~The Poetry With Noname~

By かな

◇ 2011/05/08 (Sun)

AM-特別企画 春の院展鑑賞

春の院展が近くで開催されて、この日が最終日。画家の佐藤悟さんよりご招待を受け、ふだん、なかなか触れる機会のない日本画を、みんなで一緒に、作家さんのガイド付きで鑑賞しちゃおう！と、高校生を含む四名が集まりました。ほとんど未知の世界である日本画と個々の作品について、佐藤さんが、じっくりとツツツツ話して聞かせていただきました。

好きだなんて思えるもの、美しいと感じるもの、不思議なもの。辛い記憶や怖れや、または願い。それぞれに、自分のステーションで、持てる全てを注ぎ込んで精一杯に「詩」を表現した、その結果が作品となって並んでいるわけで、迫力満点、好奇心もピンパン刺激され…。全ての芸術の根源には「詩」がある。詩人は言葉を紡ぎ「詩」を表現する。日本画家は、線を描き、色を重ねて「詩」を描く。色はひびき、線は「詩」があつてこそ。一方、同じように時間をかけて作品を作り上げていくことこそ同じであれ、日本画の世界では、構図や技巧と

いったある種の決まり事、一定の手段・手法に則った評価軸があるらしい、そこには強い師弟関係があり、先を行く者の指導が尊ばれる傾向が強いらしい。言葉がパートナーの詩人にも、確かにテクニクといえるようなものはあるけれど、作品そのものを指導する・される、というのは、あんまり馴染みが無いことのように思い、不思議に感じられました。反対に、佐藤さんには詩人たちのことが不思議なんだそう☆



PM-つよつよ二年目！ 名も無き詩の鑑賞会

午後はお待ちかねの、名も無き詩の鑑賞会。三月は地震の影響でお休み、久しぶりの開催は、静かに黙祷から始まりました。午前からなだれ込んだ四名に、初めて遊びに来てくれた方を含む四名が加わり、八名で時間いっぱい語り合いました。



そうですね。学校生活のこと？ 道徳について？ 痛みに気づくこと？ 全く違う感性で「しんけい」が楽しくスキップしていると読み取った人もいます。一体、この詩はどんな人が書いたのか、どんなことによって書かれたのか… 参加者一同、詩への想いが膨らみます。

今回持ち込まれた詩には、これまでになく社会的で、かつ厳しいものもありました。震災と震災に端を発した原発事故について、それぞれに思いがある中、今、名も無き詩の鑑賞会が開かれることにも、意味があるように感じます。まずは、しっかりと目を見開いて、自分自身をさちんと生きなくては、という「ぼくらの理由」大坪さんの言葉を思い出します。

八代さんは、作者名を伏せて… というより、実際に作者が不明という詩を紹介してくれました。

しんけい

しんけいがあるいていた。  
 みんながあとへついでいったら、  
 一人の女の子が道のところに立っていた。  
 そこへ一人の子がとうめいになって、  
 とんで行ってたいた。  
 でもその女の子はきがつかない。  
 そのつぎの子がいつつねった。  
 でもきがつかない。  
 つぎの子つぎの子とどんどんいって、  
 いじめてもきがつかない。  
 少しずつ、  
 しんけいがあるいてきた。  
 その女の子の中へとことこはいった。

ちよっと不思議な詩。八代さんは目線にびっくりした

- 八人で鑑賞した詩のタイトルは・・・
- ・ 展覧会
  - ・ ある日 丘の上で
  - ・ スキャンダル(醜聞)
  - ・ ぼくが ここに
  - ・ しんけい
  - ・ 戦場のカメラマン
  - ・ わたしの やきもの紀行
  - ・ ほしくず
  - ・ 片道想い

名も無き詩の鑑賞会 ~ The Poetry With Noname ~

奇数月の第二日曜日、定期開催

ひとりひとりの

詩への想いを大切にします。

